

ミスター・ロンリー

2007(平成19)年12月19日鑑賞(GAGA 試写室)

★★★



監督・脚本=ハーモニー・コリン/出演=ディエゴ・ルナ/サマンサ・モートン/ドニ・ラヴァン/レオス・カラックス/ヴェルナー・ヘルツォーク (ギャガ・コミュニケーションズ 配給/2007年イギリス、フランス映画/111分)

……主役はマイケル・ジャクソンとマリリン・モンロー。といっても、モノマネ芸人だが……。テーマは「なぜ、普通の人として生きられないの?」ということだが、全編通じて風変わりなこの映画の問題提起はわりと難解。ちなみに、この映画はハーモニー・コリン監督自身の「死と再生の物語」ともダブっているようだから、その点のお勉強も……。

第4章

ひとつとして同じ人生などない

タイトルから思うことは……?

このタイトルは原題も邦題も全く同じだが、『ミスター・ロンリー』というタイトルからあなたが思うことは……? 映画の冒頭、ポケバイ(ポケットバイク)に乗った怪しげな男(?)が少しずつクローズアップされてくる中、ボビー・ヴィントンが歌う懐かしいバラード『ミスター・ロンリー』の曲が流れてくる。1964年に大ヒットしたこの曲は、ラジオの長寿番組『ジェットストリーム』で35年以上にわたって主題歌として使われてきたお馴染みの名曲だが、こりゃ一体何の映画……?

主演はマイケル・ジャクソンとマリリン・モンロー……?

冒頭に『ミスター・ロンリー』の全曲が流れたのちスクリーン上に映るのは、パリのストリート上でマイケル・ジャクソンのパフォーマンスをくり広げているアメリカ人のモノマネ芸人の主人公マイケル・ジャクソン(ディエゴ・ルナ)。外国ではよく見かける風景だが、よく見ているとたしかにそのパフォーマンスの早業はお見事。もっとも、通行人はそれをニヤニヤしながら眺めているだけで、コインを投げ入れてくれない様子……。

そんなマイケルに老人ホームへの慰問の仕事を出したのは、エージェントのレナード（レオス・カラックス）だったが、なぜかその会場には、マリリン・モンロー（サマンサ・モートン）が登場。帰り道、カフェで本を読んでいるマリリンを発見したマイケルはすぐに「英語が上手だね」と声をかけると、彼女もアメリカ人のこと。すぐに仲良くなった2人が、そこで交わす「いつからマリリンなの?」「おっばいが膨らんでからよ」という会話は、いかにもおしゃれ。

しかし、ここまできても、こりゃ一体何の映画……?

さらにチャーリー・チャップリンも……

マリリンに扮するサマンサ・モートンはどこかで見たと思っていたら、あの『エリザベス』でスコットランド女王メアリー・スチュアートを演じていた女優。そこでは、幽閉されているながらも当然女王らしい気品を見せていたが、『ミスター・ロンリー』では、愛嬌たっぷりでユーモラスな雰囲気がいっぱい。

そんなマリリンだが、実は彼女は既に結婚しており、7歳の娘もいるらしい。また、夫のチャーリー・チャップリンは娘と共にスコットランドの山に囲まれた古城で、モノマネ芸人たちと共同生活をしているとのこと。そこでマリリンに一目惚れしてしまったマイケルは、彼女に誘われるままに、スコットランドに旅立つことに……。

なぜ、普通の人として生きられないの……?

この映画のテーマは、「なぜ、普通の人として生きられないの?」という問いかけ。つまり、マイケルもマリリンもチャップリンも、そしてスコットランドの城で共同生活を送っているサミー・デイヴィス・Jr.、マドンナ、ジェームス・ディーン、エリザベス女王、シャーリー・テンプル、ヨハネ・パウロ2世、リンカーンそして赤ずきんちゃんらは、みんな普通の人として生きることができない人たちばかり。それは一体なぜ……?

彼らは今、手づくりの劇場で開く地上最大のショーに向けて心をひとつに頑張っているが、内心は観客はホントに来るのだろうかという不安でいっぱい。映画の中盤に、この「地上最大のショー」が演じられるから、それをじっくりと味わっていただきたい。しかして、その観客は……? そして観客の反応は……?

現代の奇跡をどう見れば……？

この映画は、スコットランドで共同生活を送るマイケルたちの姿と交錯させながら、パナマのある地を舞台としてくり広げられる、アンブリオ神父（ヴェルナー・ヘルツォーク）とシスターたちの奇跡の物語を描いていくが、それは突拍子もないお話。つまり、主を信じているシスターたちは飛行機から落ちても墜落することなく、スカイダイビングに成功したというお話。しかし、一体誰がそんな話を信じるの……？

ところが、そんな現代の奇跡と神父たちの普及活動を聞いたバチカンの法王からは、謁見を許すとの連絡が。シスターたちを乗せ神父が操縦する小型飛行機は、喜び勇んでローマへと飛び立ったが……。

これは監督自身の死と再生の物語……？

この映画を監督・脚本したハーモニー・コリンのことを私は全然知らなかったが、プレスシートによれば、彼は19歳の時に書いた『KIDS／キッズ』（95年）の脚本によって、「恐るべき子供（アンファン・テリブル）」として世間の注目を浴びたとのこと。そこから彼の快進撃が始まったが、ここ8年間は長い沈黙時代に入っていたとのこと。

したがって、この『ミスター・ロンリー』は、ハーモニー・コリン監督自身の「死と再生の物語」とダブっているとのことだ。そんなハーモニー・コリン監督の思いが表現されているのが、前述した現代の奇跡の物語……？ こんな何とも不可解な映画をつくるハーモニー・コリン監督には、今後も注目していかなければ……。

2007(平成19)年12月20日記